



念ずれば花ひらく

去る10月4日、伊予の松山で故坂村真民先生の生誕100年祭が行われました。
真民先生が97歳で亡くなられて3年が経ち、先生が生きておられれば100歳となられた今年平成21年10月4日にこの会が企画され、坂村真民先生所縁の人達が全国から集まり、先生を振り返り心温まる時間を共有しました。

徳真会グループと真民先生の縁は平成3年に逆のぼります。
徳真会の創業10周年を記念して創業の地の新潟県旧新津市に「念ずれば花ひらく」の石碑を建立寄贈する為のお願いに、先生のお宅にお伺いした時から始まります。
建立後、当時82歳の真民先生が娘の真美子さんと新津市までおいで頂き、石碑に「入魂」されました。
秋葉山公園の仏舎利塔の脇に建立させてもらった伊予の青石に刻み込んだ「念ずれば花ひらく」の石碑は、仏教への造詣深い真民先生から大変喜んで頂き、「パゴダのある街」という詩を書いて頂いたのが昨日の様に思い出されます。

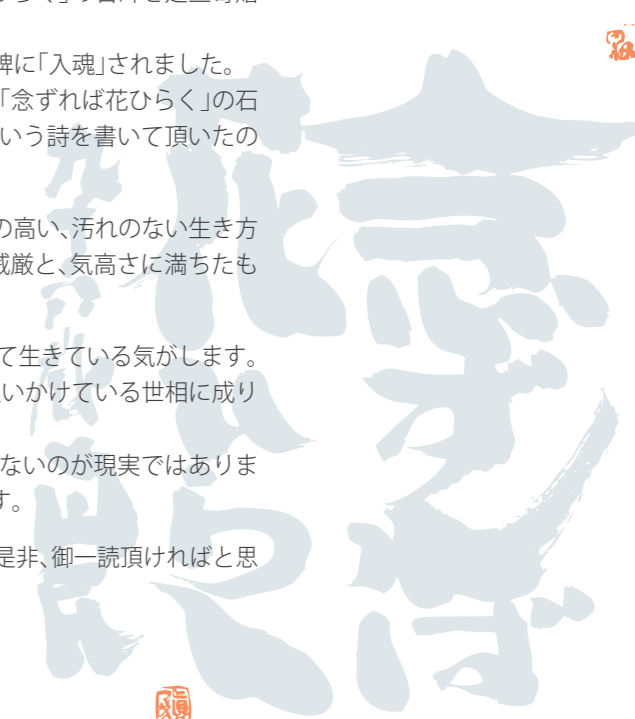
真民先生の人生は、本当に数々の御苦労の多い人生でありながら、魂の格の高い、汚れのない生き方をされ、先生の詩は、読む人達が皆、心洗われる気持ちになれる、優しさ、威厳と、気高さに満ちたものでした。

今日の日本は、何か先が見えない時代の中にあって、皆が強い閉塞感を持って生きている気がします。
また、一步国外へ目を転じて、哲学の無い金の亡者が、先を競って利を追いかけ続けている世相に成り下がっているのが世界の現状の様でもあります。
日本も、こうした世界の流れの中で、これらの国々と伍してゆかねばならないのが現実ではありますが、時には立ち止まって、真民先生の詩で心を洗う時間を持ちたいものです。

真民先生の詩集や書は、徳真会のほとんどの診療所に飾ってありますので是非、御一読頂ければと思います。

最後に私の好きな真民先生の詩をいくつかを紹介させていただきます。
真民先生との碑縁に心より感謝いたします。

合掌



パゴダのある街

新潟県新津市の
秋葉公園頂上には
パゴダがあり
そのパゴダと並んで
念ずれば花ひらく
第百七十一番碑が建立された
瓢湖に集まる白鳥たちも
このパゴダを目じるしにして
飛んでくるだろう
四季折々の風も
仏陀世尊の心を伝えて
ここから吹いてゆくだろう
除幕入魂のお経は
わたしが唱えた
石は四国西条の青石
石よ
生きとし生けるものの幸せのため
幾世紀も建ち続けてくれ

人と生まれて

日の出ずるも見ず
日の沈むも知らず
月星光り輝けど
仰ぐこともせず
老い
そして死ぬ
牛馬なれば
せんかたなきも
人と生まれ
かなしと言わん
あわれと言わん

念ずれば花ひらく

苦しいとき
母がいつも口にしていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった
そうしてそのたび
わたしの花がふしぎと
ひとつひとつ
ひらいていった

鳥は飛ばねばならぬ

鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ
怒濤の海を
飛びゆく鳥のように
混沌の世を生きねばならぬ
鳥は本能的に
暗黒を突破すれば
光明の鳥に著くことを知っている
そのように人も
一寸先は闇ではなく
光であることを知らねばならぬ
新しい年を迎えた日の朝
私に与えられた命題
鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ